ひょうご伝説紀行
- 語り継がれる村・人・習俗 -

小野豆の隠里
茄子作らず・鶏飼わず

伝説　小野豆の隠里
　茄子作らず・鶏飼わず

紀行　西播磨の山々と平家塚
・西播磨の山々と小野豆
・平家塚とジャンジャン穴
・富満の万勝院
・羅漢の石仏と感状山城

関連情報　用語解説
参考書籍
所在地リスト

兵庫県立歴史博物館ネットミュージアム
ひょうご歴史ステーション

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

小野豆の隠里
茄子作らず・鶏飼わず

８００年以上前、源氏（げんじ）と平氏（へいし）がはげしく戦った時のことです。

平清盛（たいらのきよもり）の弟、三位少将経盛（さんみのしょうしょうつねもり）は、名高い歌人であり、笛や管弦（かんげん）の名手としても知られた人でした。清盛が高い位に上りつめてからは、追捕使（ついぶし）として、治安に目を光らせることになりましたから、武勇の人でもあったのでしょう。

しかし、繁栄（はんえい）をきわめた平氏も、源氏との戦いがはじまると敗北をくり返すばかりです。再起をはかった一ノ谷（いちのたに）の戦いでも、激戦の末に敗れ去りました。このとき経盛は、三人の子、経正（つねまさ）、経俊（つねとし）、敦盛（あつもり）をなくします。
清盛が亡くなった後、一族を束ねる立場にもあった経盛は、さらに屋島（やしま）、壇ノ浦（だんのうら）と戦いぬきます。平氏の栄えと敗北のすべてを見た経盛の心中は、どんなものだったでしょう。老いた体にむち打って、経盛は最後の戦いにのぞみました。しかし奮戦（ふんせん）むなしく平氏は敗れ、一族の武将もあるものは討ち死にし、あるものは海へと身を投げたのです。経盛も矢傷を受け、入水（じゅすい）したと伝えられていますが、播磨（はりま）にはその後の経盛の伝説が残されている場所があります。

ひょうご伝説紀行　「小野豆の隠里」茄子作らず・鶏飼わず

壇ノ浦の戦いに敗れた後、平経盛は、何人かの家来とともに、播磨国までのがれてきました。そして、上郡（かみごおり）の小野豆（おのず）という深い山里にかくれ住んだといいます。
源氏の追求は速くて、しつこいものでした。しかしさすがの源氏の兵たちも、山にかくされた小野豆の里をなかなか見つけることはできませんでした。兵たちがつかれ果てて休んでいるときです。川上から茄子（なす）と箸（はし）が流れてくるのが見えました。

「このようなものが流れ下るとは、川上に人がいるにちがいない。」
兵士たちは森をぬけ、けわしい谷をさかのぼって、ついに小野豆の里を見つけ出しました。けれども、経盛主従がかくれている場所がわかりません。その時です。とつぜん、鶏（にわとり）が鳴く声がひびきました。

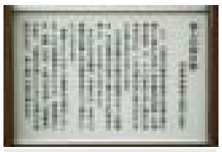
その声をたよりに、兵たちはとうとう経盛主従を見つけ出してしまいました。
「私の命はかまわない。どうか家来たちの命は助けてやってくれ。」
経盛はそう言うと、自分はその場で切腹して果てたということです。

その後家来たちは許されて小野豆の地に永住し、村を見下ろす尾根の上に、経盛の墓が建てられました。今も村人たちは、平家塚と呼んで手厚くお祭りをしています。そして、経盛主従が見つかるもとになった茄子や鶏は、決して村では作ったり飼ったりしないと決めたそうです。

紀行「西播磨の山々と平家塚」

西播磨の山々と小野豆

播但国境付近を除けば、西播磨（にしはりま）にはさしたる高峰はない。千種川（ちくさがわ）の流域にある山々は、どれもたおやかな里山である。しかし里山であっても、幾重にも重なる尾根は、時に深山幽谷の姿をほうふつとさせ、また時には高原地帯のような景観を見せてくれる。



落人の里（説明板）

久しく開墾されてきた山では、思いもよらないところで小さな里に巡り会う。雑木林を抜け、急な谷を詰めた奥。よくこんな所を開墾したものだと、感嘆せずにはいられないような場所である。

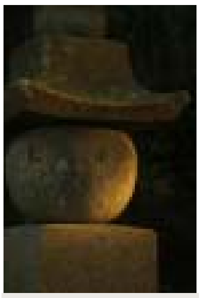
それにしてもどこの里も穏やかである。都会の騒がしさを離れ、時間もゆっくりと流れているようだ。無論、都会の生活からはわからないような苦労も多かっただろうけれど。

小野豆（おのず）は、そうした山里のひとつである。

西播磨の山並み（平家塚から）

平家塚とジャンジャン穴

小野豆の村は、上郡町（かみごおりちょう）の東部に広がる300mほどの山地にある。県道姫路上郡線で、たつの市から椿峠（つばきとうげ）をこえると、ほどなく北側に宿の集落が見えて、その道のわきに、「小野豆平家塚」と書かれた小さな看板が立っている。



南無阿弥陀仏

案内の通りにたどると、道は里を離れてどんどん山奥へと入ってゆく。何度か急なカーブを回り、坂を上り詰めたところに、小野豆の村がある。初めてこの村を訪ねたとき、「隠れ里」という言葉が浮かんだ。今でこそ舗装道路があるが、わずかな杣道（そまみち）が通るだけだったころには、ふもととの往来でさえ大変な苦労だったことだろう。なるほど、源氏の兵士たちも、これほど奥に村があるとは思わなかったに違いない。

平家塚（碑）

平家塚

村を抜けて、さらに登った尾根の上に立つ大きな五輪塔が、平家塚である。こけむした塔の側面には、南無阿弥陀仏の文字が一つずつ刻まれている。このあたりからは、南西に眺望が開けている。到着したのはまだ早朝だったので、ゆったりと流れる霧がまるで雲海のように見える、素晴らしい光景を目にすることができた。

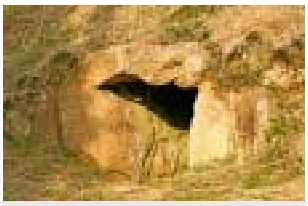
平家塚

平家塚は今も村の人たちが大切に守り続けていて、毎年10月の第1日曜には、平家祭りが催されている。

ジャンジャン穴へは、小野豆村の中ほどから家の間を抜けて、階段を登ること5分ばかり。整地された山腹に古墳の入り口のような石積みがあって、これがジャンジャン穴なのである。言い伝えによれば、平経盛（たいらのつねもり）と家来たちはこの穴に隠れ住んでいたという。ジャンジャン穴という名の由来は、穴の奥に向かって声をかけると、「ジャンジャン」と響くからだという。

この穴自体は2003年に、地元の方々によって復元されたということだから、元々どんな形であったのかはわからないが、落人たちが住むのであればこうした場所であったろう。

ジャンジャン穴



ジャンジャン穴（入口）

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

富満の万勝院

　万勝院（まんしょういん）がある富満（とどま）も、まるで隠れ里のような、下界を離れた別天地である。小野豆からは広い谷筋ひとつを隔てた北にある。尾根の上にある境内はボタンの花で有名で、季節には観光に訪れる人も多い名所である。

万勝院

万勝院（門）

万勝院（奥の院）

　奥の院はその下の谷にある。ボタンの花が植え込まれた境内とはうってかわって、杉木立に囲まれ、森閑とした空気に包まれている。厚くこけが育った地面に、紅葉したイチョウやカエデが幾枚か散り、風の音と鳥の声だけが聞こえていた。

万勝院（奥の院）

夕日の鬼面と牡丹

羅漢の石仏と感状山城

石仏の窟

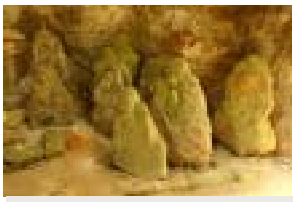
　相生市（あいおいし）は、上郡町からは山一つ隔てた東にある。相生湾で5月におこなわれるペーロン祭が有名で、海に面した町の印象が強いけれども、県道姫路上郡線（旧山陽道）から北の市境の三濃山（みのうさん）までは、田園風景と里山が広がっている。

　その三濃山から感状山（かんじょうさん）へとのびる尾根に抱かれるように、羅漢石仏群（らかんせきぶつぐん）がある。山腹にせり出した巨大な岩盤に覆われた岩窟（がんくつ）に、釈迦如来（しゃかにょらい）、普賢菩薩（ふげんぼさつ）、文殊菩薩（もんじゅぼさつ）のほか、十六羅漢（らかん）の像が並んでいる。室町時代に作られたと言われているが、詳細はわからないことが多いようだ。

　岩窟の前には、樹齢500年を越えていただろうと思える、巨大な杉の切り株があった。この石仏を刻んだ人が植えたのであろうか。今はその切り株の中に、二代目の若杉が育っている。

石仏（左側）

石仏（中央）


石仏（右側）

　その東にある尾根の頂上付近が、赤松氏（あかまつし）の城、感状山城である。国史跡にも指定されている室町時代初期の山城で、平野を見下ろす険しい山であるが、今は登山路も整備されている。

　この周辺一帯は、西播磨丘陵県立自然公園に指定されており、いろいろな施設も整えられている。歴史や伝説とともに、豊かな自然を訪ねることもできる。

感状山城（遠景：南から）

説明板

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

用語解説

【平経盛】たいらのつねもり

平安時代末期の武将（1124～1185）。平忠盛の子、清盛の異母弟である。保元の乱の後、安芸、常陸、伊加などの国守を経て若狭守となる。以後、追捕使や朝廷の守護の任にもあたる。源氏との戦いがおこると、一門とともに西国へ落ち、1184年の一ノ谷の戦いで、息子の経正、経俊、敦盛らを失った。壇ノ浦の戦いで入水（じゅすい）。

【千種川】ちくさがわ

西播磨を流れる河川。兵庫、鳥取県境の三室山に源流をもち、西播磨西部を南流して瀬戸内海に注ぐ。全長67.6km、流域面積は752平方キロメートル。上流部の宍粟市千種町付近では、古代から製鉄がおこなわれ、河口の赤穂市では近世以降製塩業が発達した。環境省が定めた名水百選に選ばれた清流である。

【五輪塔】ごりんとう

墓、または故人を供養するために建てられた塔の一種。多くは石製。下から順に、基礎、塔身、笠（かさ）、受花（うけばな）、宝珠の五段に積み、それぞれが、地、水、火、風、空をあらわす。密教に由来し、平安時代中ごろから造られるようになった。

【万勝院】まんしょういん

上郡町の富満高原（とどまこうげん）にある真言宗の寺院。正式には大通宝山富満寺（おおつぼさんとどまじ）万勝院という。富満寺万勝院は、奈良時代行基によって創建されたと伝えられるが、嘉吉の乱で荒廃し、その後赤松氏によって復興された。江戸時代には池田輝政によって6院33坊が造られて、富満寺と称したが、明治時代に5院が廃され、万勝院のみが残ったという。空海にもゆかりの寺とされる。境内裏手の山の斜面にボタン園が設けられ、牡丹寺と呼ばれる。

【瓜生羅漢石仏群】うりゅうらかんせきぶつぐん

相生市矢野にある石仏群。羅漢山ふもとの岩陰（幅7.7m、高さ5m、奥行き4m）に、釈迦三尊像（釈迦如来、普賢菩薩、文殊菩薩）を中心として十六羅漢の石像が安置されている。伝説では、朝鮮の僧恵弁・恵聡（えべん・えそう、ともに『日本書紀』に記された飛鳥時代の渡来僧。恵弁は、蘇我馬子の仏教の師であったとされる）がここに隠れ住んで作ったというが、実際の製作年代は室町時代と推定されている。

【山陽道】さんようどう

奈良時代に政府によって整備された、平城京から大宰府に至る道。古代では最大規模の街道で、幅6～9mの道路が直線的に設けられていた。平安京に遷都後は、起点が平安京となる。外国の使節が通行することが予想されたため、同様に整備された七街道の中で、唯一の大路に格付けされて最重要視された。途中には56駅が設けられていた。

江戸時代には、古代山陽道を踏襲して西国街道が整備され、現在の国道2号線も一部で重複しながら、これに沿って設けられている。

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

【感状山城】かんじょうさんじょう

相生市森にある室町時代の城跡。14世紀初めに赤松則祐が築城した。標高240㎜の感状山頂を中心として、梯郭（ていかく）式縄張をもつ山城である。嘉吉（かきつ）の乱（1441）で廃城となったが、15世紀後半に赤松義村が再興した。

感状山城の名は、新田義貞の軍勢を50余日にわたり足止めをした功績により、赤松則祐が足利尊氏に感状を授かった事に由来する。中世山城の状態が良好に残されており、国指定史跡となっている。

【赤松氏】あかまつし

中世播磨の豪族。赤松は佐用荘内の地名。赤松則村（円心）が足利尊氏に属し、新田義貞との戦いに勝利して守護に任じられた。後には備前、美作の守護にもなり、幕府の四職（ししき、室町時代の武家の家格。三管・四職と総称する。三管とは管領に任じられる、斯波（しば）、細川、畠山の三家、四職とは侍所頭人に任じられる、赤松、一色、山名、京極の四家をいう）として室町幕府の重臣となった。

しかし1441年に赤松満祐（あかまつみつすけ）が将軍足利義教を殺し、幕府軍の攻撃を受けて一族は没落した（嘉吉（かきつ）の乱）。その後赤松政則が再興したが、家臣であった浦上氏、宇喜多氏に領国を奪われ、さらには関ヶ原の戦いで西軍に属した赤松則房が戦死。一族は断絶した。

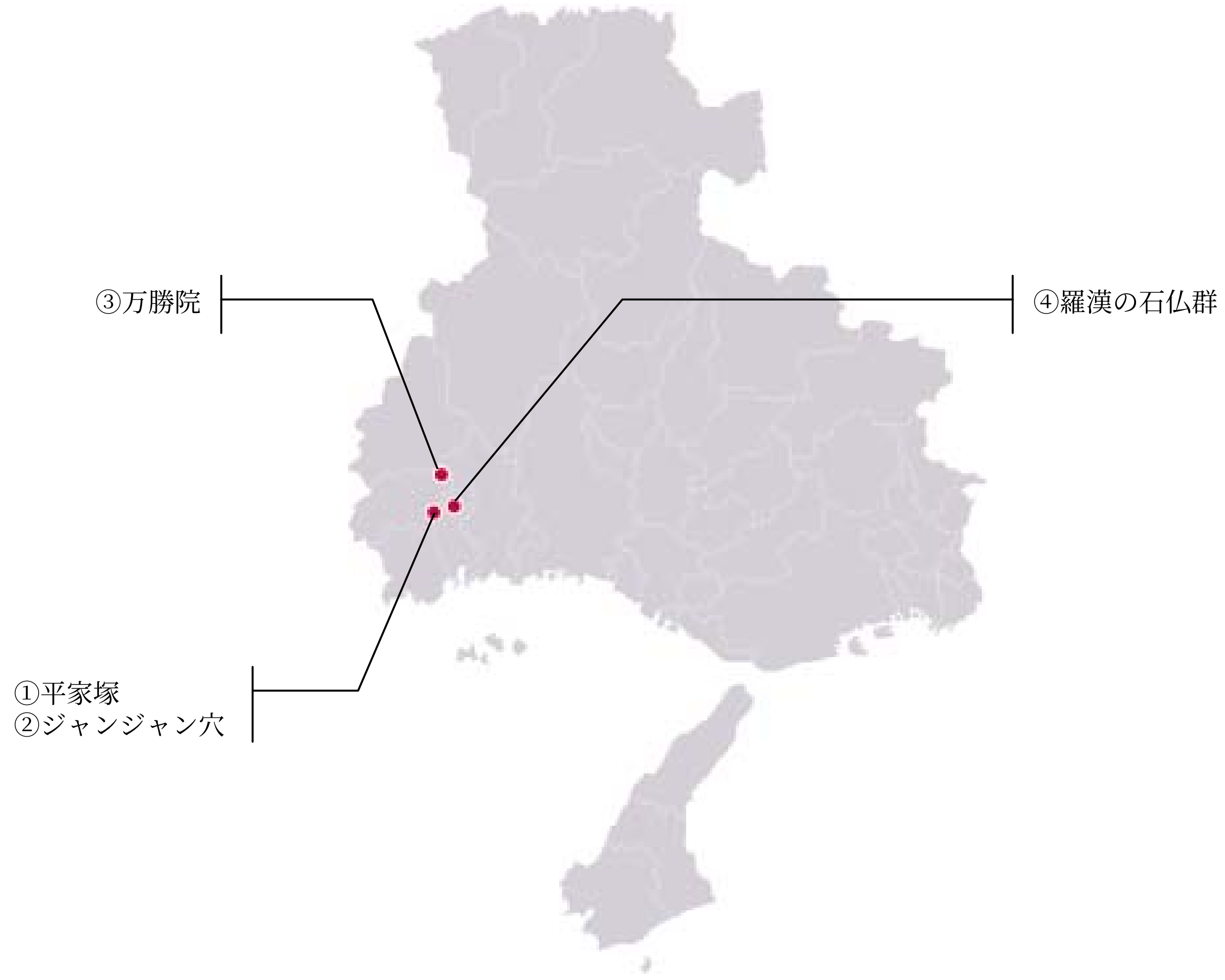
赤松義則（1358～1427）は、室町時代の武将。赤松満祐は義則の嫡男、政則は玄孫にあたる。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	郷土の民話西播篇	1972	郷土の民話西播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
歴史･文化等	兵庫県大百科事典（上･下）	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	増訂　日本仏家人名辞書	1979	鷲尾順敬	東京美術

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

所在地リスト



①平家塚	赤穂郡上郡町小野豆
②ジャンジャン穴	赤穂郡上郡町小野豆
③万勝院	兵庫県赤穂郡上郡町大富2312 万勝院
④羅漢の石仏群	相生市野矢野町瓜生

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行
http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/
編集発行　兵庫県立歴史博物館
〒670-0012　兵庫県姫路市本町６８　TEL 0792-88-9011
第1刷　2007年4月1日

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.